

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32632

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22720030

研究課題名(和文) ソ連崩壊後におけるロシアの教育と宗教～宗教文化教育が果たす機能

研究課題名(英文) Education and Religion in Post-Soviet Russia: the function of education on religious culture

研究代表者

井上 まどか (INOUE, Madoka)

清泉女子大学・文学部・講師

研究者番号：70468619

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ソ連崩壊後のロシア連邦において、宗教文化教育を公教育に導入するという試みが実現化した。ロシアの宗教文化教育を分析する本研究は、ソ連崩壊後のロシアにおいて「伝統宗教」とされる諸宗教が、いまなお、人々を結束させる機能を求められていること、つまり、統治と深く関わりがあることを明らかにした。また、今日のロシアにおいて、「ロシア人論」と宗教をめぐる言説とが深く結びついていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The study of education on religious culture in Russia made it clear that traditional religions in Russia are still required the 'binding' function in Post-Soviet Russia. It means that the perspective of governance is needed for further analyses on Russian religions. Our study also revealed that discourses on religion have been closely associated with discourses on 'Who is a Russian?'.

研究分野：宗教学宗教史学

キーワード：宗教教育 政教関係 宗教復興 ソ連崩壊後 ロシア連邦

## 1. 研究開始当初の背景

社会主義体制の崩壊とともに、ロシアは広大な連邦を統治する諸制度と理念の再整備に迫られた。教育界においては、ソ連型的人格教育は姿を消し、歴史学界においては、ロシア史の再構成が求められ、宗教界においては、宗教の自由化とともに流入した外来の新宗教への対応が迫られた。その過程において、連邦レベルにおいてはロシア正教が統治機能をもつ存在として注目されるようになる。宗教文化教育の公立初等・中等教育課程への導入は、90年代後半から議論され、地域的に実施されているが、これも、この国家統治理念の再構築および新しいロシア連邦民の育成という課題が重視されているためである。

近年の研究、とりわけ欧米の宗教社会学においては、「宗教復興」「脱世俗化」という概念によって、ソ連崩壊後のロシア正教会の台頭が論じられてきた。宗教が公共的役割を担わされて復興しつつある、という議論である (P. Berger やカサノヴァ)。また、比較法学においては90年代の宗教法の制定および諸改正にみられる政治と宗教との協同関係が考察され、人類学においては、ソ連崩壊後の地域社会における文化・歴史遺産としての宗教の復興が検討され、政治学においては、宗教による世俗政権の正当化機能が考察されてきた。

とはいえしかし、研究開始当初、ロシア連邦における「宗教復興」というテーマは、理論的検討がなされぬまま、あるいは諸ディシプリンにおける研究成果が相互に検討されぬまま、個別の議論が展開されている状況にあった。

研究代表者は、本研究開始以前に、ソ連崩壊後の宗教行政の変化について考察を行っていた。それらの研究は、ソ連崩壊後における伝統宗教の台頭を、宗教の統治機能の要請という視点から考察したものであった (例：井上まどか「現代ロシア連邦における

政治と宗教—宗教関連の法制化を中心に」 (『<宗教>再考』所収) 同「ロシア連邦における公と宗教の現在」(『国際宗教研究所ニュースレター』第43号所収)。

これらの考察の結果、さらなる課題として浮上したのは、ソ連崩壊後における宗教および教育の役割を精査することである。それには、1997年の宗教法で制定された宗教と国家の諸分野における協同関係 (パートナーシップ) が、教育の分野において実現されつつあったという背景もある。

本研究は、教育における国家と宗教の協同関係に焦点を絞ることによって、ソ連崩壊後のロシアの政教関係および「宗教復興」概念についての考察を深めることが可能になる、という判断のもと、研究が開始された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的はおもに以下の2つである。

- (1) 宗教文化教育の公教育への導入をめぐる議論の分析を通して、社会主義体制の崩壊という国家再編期を経験したロシアの公教育において、宗教がいかなる役割を担わされているかを明らかにする。
- (2) 宗教文化教育の実施にあたり、ロシアの諸宗教の中でも他に先駆けて取り組みを見せていたロシア正教会を事例として、教会内部で、教育をめぐるどのような取り組みが見出されるかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

- (1) 宗教文化教育の公教育への導入過程を諸資料により明らかにする。
- (2) 宗教文化教育で用いられている教科書の内容を分析する。
- (3) 宗教文化教育の公教育への導入をめぐる議論において、前景化している論点を整理・分析する。

(4) ロシア正教会において、教育をめくり、どのような取り組みがなされているかを分析する。

#### 4. 研究成果

以下の(1)～(4)は上記「研究の方法」の(1)～(4)に対応するものとする。

(1)ロシア連邦では、ソ連崩壊後より国立学校および国立大学における宗教教育の是非が論じられてきた。本研究では、おもに国立学校（初等・中等教育）への宗教文化教育の導入に限定して分析を行なった。

国立学校への宗教文化教育の導入は、2009年の7月、メドヴェージェフ大統領（当時）が選択必修科目として導入することを発表し、推進された。2010年には、試行プログラム「宗教文化と世俗倫理の基礎」科目が19の連邦構成主体に導入された。この科目は国立学校に通う4・5年生が対象の選択必修科目であり、次の3つのうちから1つを選択する

「宗教文化の基礎」、以下の4つから選択—「正教文化の基礎」、「イスラム文化の基礎」、「仏教文化の基礎」、「ユダヤ教文化の基礎」、「世界宗教文化の基礎」、「世俗倫理の基礎」である。

公立校における宗教文化教育の実践については、1990年代末からいくつかの地域で実施が試みられてきた。この点で他宗教に先駆けて「正教文化の基礎」の教科書を作成したり、一部地域の教育委員会と連携していたのはロシア正教会である。それに続くのがイスラムであり、2004年に一部地域で「イスラム文化の基礎」科目が導入されている。

(2)「宗教文化と世俗倫理の基礎」科目の指定教科書によると、「ロシア——私たちの母国」という冒頭章と、「祖国への愛と尊敬」という最終章の記述は6つの教科書すべてに共通する。また「世界宗教文化の基礎」は実質的には正教、イスラム、仏教、ユダヤ教の文化を中心としたものであり、キリスト

教諸派については、「ロシアにおける宗教史」の章でカトリック、プロテスタント、アルメニア正教会に若干言及するのにとどまる。

「世界宗教文化の基礎」の教科書では、「多民族国家としてのロシア」が前面に打ち出されている。宗教とは物質的世界に対比される精神的世界あるいは内的世界であるとされ、宗教が包含する文化的伝統、および文化的伝統における道徳的・倫理的規範——各宗教文化における善と悪など——が強調されている。

さらに、ロシアの諸宗教が国家にいかに関与するものであったかという点に記述が集中している点は注目に値する。

正教については、他宗教に比べて最も多くの頁が割かれており、988年のウラジーミル大公の受洗以降のロシア史との関係を丹念に追う。イスラムについては、ロシアと中央アジアの商業活動ネットワークの構築という役割に注目する。ユダヤ教については、ナポレオン戦争時におけるユダヤ郵便制度の貢献、および対外戦争時の功績者の多さを指摘する。仏教については、ナポレオン戦争勝利後に建てられた図書館併設の寺院が多くの歴史的文献を所蔵していることを誇る。カトリックについては、モスクワやサンクト・ペテルブルグにおける歴史的建築物が招聘イタリア人の手になるものであること、プロテスタントについては、18世紀後半にドイツからヴォルガ河畔に移住したドイツ人の農業経済への貢献に言及する。このように、経済的・軍事的功績および芸術面や歴史研究における貢献など、諸宗教がいかに国家建設とその存続に貢献したかという点が強調されている。

(3) この宗教文化教育の導入は、以下のような論点をめぐって、宗教者・宗教学者・教育者・政治家・識者のあいだで長らく議論されてきた。論点は、教師の資格（誰が教えるのか）、使用教科書（どのような教科書を

用いるのか・また使用教科書は誰が決定するのか)、礼拝やシンボル(宗教的な身体実践やアイコンなどのシンボルを国立学校へ導入することの是非)、教授内容(「宗教文化」が包含する範囲)、国家の世俗的性格への配慮、などである。

宗教文化教育をめぐる議論を遡ると、国外の宗教団体に対する危機意識の共有という点に着目する必要がある。国外の宗教団体——とくに新宗教団体——が1990年代前半に活発な活動を行ない、さらに学校での倫理教育にも関わっていたことが、危機意識として共有され、ロシアの「伝統宗教」の道徳的・倫理的規範にもとづく教育の推進に拍車がかかったといえよう。

この点に注目し、1990年代前半のロシアにおける国外の宗教団体の活動について、とくにオウム真理教を事例にとりあげ、その後の世論形成にどう影響したかを明らかにしようとしたのが、「ロシアにおけるオウム真理教の活動」および「今なおロシアで続くオウム真理教の活動 日本とロシアの並行現象」(下記「主な発表論文等」を参照、以下同)である。

また、論点の に挙げたアイコン(正教の聖画)について、アイコンの現代的機能について分析を行ない、国立学校への導入是非をめぐる議論を理解するための手がかりにしようとしたのが「チェルノブイリ・アイコンによる記憶の伝播と共有」である。

さらに、「宗教文化と世俗倫理の基礎」科目において、国家への貢献という点が強調されること等に鑑み、宗教とパトリオティズム、およびそれと関連する「ロシア人論」についての再検討を迫られ、まとめたのが「ユートピアがディストピアになるとき—ソルジェニーツィンのロシア論における悪の不在—」である。

(4) 近年のロシア正教会は、信者を対象とした宗教教育のほかに、受刑者等の更生教育に

も携わっている。なかでも注目されるのは、青少年を対象とした道徳・倫理などの規範教育である。この点について、正教会の刊行物の中から一般の人々が入手しやすいものを資料としてとりあげ、青少年——とりわけ女性——を対象としてどのような規範的言説が展開されているかを分析したのが、「現代のロシア正教会における女性像」である。

本研究では、宗教文化教育の公教育への導入の経緯、およびそれをめぐる議論を中心に、多角的な分析を行なうことを目指してきた。しかし、残された課題も少なくない。今後は、本研究によって明らかにされた課題に新たに取り組んでいくこととする。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

井上まどか、「ユートピアがディストピアになるとき—ソルジェニーツィンのロシア論における悪の不在—」、『清泉女子大学人文科学研究紀要』35巻、査読有、67～92頁、2014年3月。

井上まどか、「チェルノブイリ・アイコンによる記憶の伝播と共有」、『現代宗教2013』、査読無、149～169頁、2013年6月。

井上まどか、「現代のロシア正教会における女性像」、『宗教と社会』第18号、査読有、49～62頁、2012年6月。

井上まどか、「ロシア連邦におけるキリスト教の興隆—ポスト社会主義ロシアにおける『宗教復興』」、『SGRAレポート』No. 57、査読無、関口グローバル研究会、15～27頁、2011年12月。

〔学会発表〕(計 5 件)

井上まどか、「2000年代における「ロシア

人論」ロシア愛国主義再考』、「宗教と社会」学会第 22 回学術大会、於天理大学、2014 年 6 月。

井上まどか、『『良妻賢母』の登場—ポスト社会主義のロシア正教会の女性像』、日本宗教学会第 70 回学術大会、於関西学院大学、2011 年 9 月。

井上まどか、「現代のロシア連邦における公教育と宗教」、日本宗教学会第 69 回学術大会、於東洋大学、2010 年 9 月。

INOUE Madoka, 'The Continuity of Discontinuity: discourses on shamanism in post-Soviet Siberia', IAHR (International Association for the History of Religions) 20th World Congress, Canada (Toronto), 2010 August.

井上まどか、「現代ロシアにおける宗教教育の展開—宗教教育をめぐる言説分析』、「宗教と社会」学会第 18 回学術大会・立命館大学衣笠キャンパス、2010 年 6 月。

〔図書〕(計 6 件)

井上まどか、「今なおロシアで続くオウム真理教の活動—日本とロシアの並行現象』、『オウム真理教のウチとソト』(井上順孝責任編集)、春秋社、掲載頁未確定、2015 年 8 月出版予定。

井上まどか、「ロシア正教会の復興』、『アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』(叢書宗教とソーシャル・キャピタル 1)(櫻井義秀・濱田陽編著)、単著、185-189 頁、明石書店、2012 年 12 月。

井上まどか、「今日のロシア人と宗教—多民族統治と宗教』、『現代ロシアを知るための 60 章』(下斗米伸夫・島田博編著)、単著、201-205 頁、明石書店、2012 年 10 月。

井上まどか、「宗教状況』、『ロシア極東ハンドブック』(堀内賢志・斎藤大輔・濱野剛編著)、単著、200-207 頁、東洋書店、2012 年 8 月。

野中進、三浦清美、ヴァレリー・グレチュコ、井上まどか共編著、『ロシア文化の方舟—ソ連崩壊から 20 年』、東洋書店、261-273 頁、2011 年。

井上まどか「ロシアにおけるオウム真理教の活動』、『情報時代のオウム真理教』(宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集)、春秋社、385-405 頁、2011 年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 まどか (INOUE, Madoka)  
清泉女子大学・文学部・専任講師  
研究者番号：70468619